煩悩成就と不断煩悩得涅槃

玉木興慈

一　はじめに

親鸞の仏教における利益について、大原性実は次のように述べる。[1]

> 親鸞の証果論、特に広義の救済の結果論の特徴としては三種を挙げることが出来る。その第一は信巻に示された現生正定聚論である。……第二は往生即成仏論である。……第三は還相摂化論である。

このうち、第三の還相摂化は利他の面であり、第一と第二の自利の面について、真宗学では二益説があると述べられる。すなわち、『大経』第十一願「設我得仏国中人天不住定聚必至滅度者不取正覚」[2]に誓われる住定聚と必至滅度は浄土における証果と窺うのが素直な見方であるが、親鸞は、住定聚は現生における利益であり、必至滅度は彼土における証果であるとみ、現当二益が誓われたものと見るのである。

親鸞の明らかにした仏教は、今日、浄土真宗と呼ばれる。[3]浄土真宗は、浄土の教えであり、浄土の教え・浄土門は聖道門に対する言葉であるが、聖道門・浄土門について、『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』と略す）「化身土巻」には、それぞれ、「此の界の中にして入聖得果するを聖道門と名づく」「安養浄刹にして入聖証果するを浄土門と名づく」[4]と記される。聖道門とは、この世（此岸）で聖者となって悟りを得る道であり、浄土門とは、浄

土（彼岸）に往生して悟りを開く道ということである。仏になる、悟りを開く、仏果（証果）に至ることについて、この世でそれを果たそうとする立場か、この世ではそれが困難なため、浄土に往生してそれを果たそうとする立場かということである。この意味においては、此岸では成仏のための修行が困難なため、修行に専念することのできる浄土に往生することが、浄土往生の大きな意義と考えられる。しかし、親鸞の仏教においては、浄土は成仏のための修行の場ではなく、往生即成仏と学んでいる。これが大原の述べる親鸞証果論の第二の特徴である。(5)

また、第一の特徴である現生正定聚論については、(6)阿弥陀仏の本願をその如くに信知する信の一念に、必ず往生することが定まる正定聚につく住正定聚の利益が「信巻」現生十益として説かれる。(7)現生十益と現世利益は言葉は似ているが、その内容を混同すべきではない。(8)「貧・病・争」の解決を直接的に説く宗教は、現世利益を説く宗教として、現代人には非常に魅力的に映るかも知れない。なるほど「貧・病・争」も現世における切実な苦難ということができるが、この現世の苦難だけを安易な方法で解決したいという思いは、宗教本来の機能を阻害することであると言わねばならない。親鸞の仏教には、煩悩に狂わされて迷いの生死を永く繰り返す他ない衆生が、阿弥陀仏の本願力によって迷いの生死を出る道が示されており、しばしばゆがんだ理解の上で使われる現世利益は、現生十益とは似て非なるものと云わねばならない。

現世で正定聚に住し、「往生が定まる」「仏になることが定まる」と説かれるが、「往生する」「成仏する」とは説かれない。成仏するという仏教の究極的な利益は、浄土往生の場で語られ、当益と考えている。

このように現当二益と学んでいる浄土真宗の利益について、本稿では「煩悩成就」と「不断煩悩得涅槃」の語を手がかりに、愚考を論ずる。

二　煩悩成就

煩悩成就という語は、親鸞の著作に散見される。具体的には、『教行信証』[9]、『浄土文類聚鈔』[10]、『入出二門偈』[11]、「高僧和讃」[12]、『三経往生文類』[13]、『親鸞聖人御消息』[14]に、のべ十箇所である。現代語で示されたものを参照すると、「あらゆる煩悩をそなえた凡夫」「煩悩にまみれた凡夫」などと訳されているほか、特記がなく「煩悩成就の凡夫」の表現をそのまま用いているものもある。[15]

煩悩成就と同様な表現に煩悩具足という語がある。煩悩具足も「あらゆる煩悩をそなえた凡夫」ということであるが、両者に注目して、すでに、幾つかの論考が発表されている。[16]ここでは、その先行研究に依りながら、煩悩成就と示す親鸞の意図について窺ってみる。

小妻論文に指摘されるように、『真宗新辞典』では、煩悩の項目の説明の中、「煩悩成就の凡夫」と「煩悩具足の凡夫」が同義として理解され、[17]これが現在の大方の理解であると考えられる。親鸞の著作の英訳を参照しても、両者を同義として扱っているようである。[18]

また、曇鸞の関係箇所では煩悩成就が、善導に準拠する箇所では煩悩具足が用いられていることが、紫雲論文で報告されている。ただし、『教行信証』において、「煩悩具足」の語を見出すことは出来ない。行巻の智昇引文（『真聖全』II、三四頁）や信巻の『涅槃経』引文（八七頁）に「煩悩を具足」と書き下す文言があるが、原漢文では「具足煩悩」である点は、注意を要する。[19]つまり、具足煩悩は、「煩悩を具足する」と読まざるを得ないが、煩悩成就は、「煩悩を成就する」「煩悩が成就する」の読みが可能であるということである。[20]

さて、煩悩成就・煩悩具足のうち、より馴染みのある言葉は、煩悩具足であろう。『仏教語大辞典』の項目の有

無もこれを示唆していると考えられる。筆者が親鸞の仏教を学び始めた頃に、煩悩具足の語はシックリと来たが、煩悩成就の語にはどことなく違和感を感じたことを強く覚えている。「煩悩」という語と「成就」という語が、うまくつながらなかったからである。

煩悩とは、『唯信鈔文意』に「煩は身をわづらはす、悩はこころをなやますといふ。」と記されるように[21]、私たち凡夫を心身ともに煩わせ悩ませるものである。また『尊号真像銘文』や『一念多念文意』に「煩悩悪業」と熟語されるように[22]、煩悩は悪へとつながるはたらき・作用がある。貪欲・瞋恚・愚痴が三毒の煩悩といわれるが、これら煩悩から離れることができない存在を凡夫と考えることもできる。つまり、仏になるためには、煩悩を減少・消滅させることが求められるのである。

一方、成就とは、手元の辞書によれば、「できあがること。なしとげること。成功。達成。」と記される[23]。親鸞の著作には、成就の語は多く用いられており、その一一を挙げる暇はないが、「本願成就」「阿耨多羅三藐三菩提を成就する」「大悲心を成就する」「行成就」などと用いられ、達成すべきことがらを成し遂げた時に、成就と表されている[24]。

消滅すべき煩悩を消滅することができ、「成就」という語を用いられているとすれば全く違和感はない。しかし、『一念多念文意』には、「凡夫といふは、無明煩悩われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」と説かれるように[25]、貪欲・瞋恚・愚痴・嫉妬などの煩悩は臨終の一念まで消えることはないと示され、また『教行信証』「信巻」に「貪愛の心常によく善心を汚し、瞋憎の心常によく法財を焼く」とあり[26]、常に断えることなく、煩悩に惑う存在が凡夫であるというのである。それが凡夫である私の正体だといわれる。

興隆（一七五九～一八四二）が「必ず是れ断惑証理・入聖得果なり」と記し[27]、臼井元成が「仏教がめざす究極の目標は、転迷開悟・断惑証理と云われる」と記されるように[28]、迷いの根源としての煩悩を断つことが、凡そ、仏教の究極的な目標と考えられる。

しかし、親鸞は、煩悩を断つべきであるにもかかわらず、煩悩を断つことのできない凡夫に対して、「煩悩成就」と示される。「にもかかわらず」の部分が違和感のもとであると考える。

『教行信証』における煩悩成就の初出は、「証巻」冒頭の御自釈であるが、義山（一八二四～一九一〇）のこの箇所の解釈を窺うと、「通途の法軌は三惑を断じて当に大果を得べし、今は一毫未断の凡夫にして、而も得証するは仏の廻向に因る」とある[29]。「通途の法軌」と「今」との乖離が、「にもかかわらず」であろうが、この両者を繋ぐものが、「不断煩悩得涅槃」であろう。この点を以下に論究する。

三　『論註』における不断煩悩得涅槃

先に数えた通り、煩悩成就の語は、親鸞の著作の中、十箇所に用いられる。その典拠は、曇鸞（四七六～五四二）の『無量寿経優婆提舎願生偈註』（以下、『論註』）下巻の「有凡夫人煩悩成就亦得生彼浄土三界繋業畢竟不牽則是不断煩悩得涅槃分焉可思議」であると見ることができる。

このことは、『教行信証』における煩悩成就の語の初出である「証巻」御自釈の解釈に於いて、すでに石泉（一七六二～一八二六）が「煩悩成就凡夫等は、十一願の上は文に見へぬことなり」と記し[30]、玄智（一七三四～一七九四）や興隆、芳英（一七六四～一八二八）、善譲（一八〇六～一八六六）、義山もそれぞれ、「煩悩成就は、論註下に云く、凡夫人煩悩成就と有る」[31]、「煩悩成就凡夫の語は、註論より出づ」[32]、「然煩悩成就凡夫、生死罪濁群萌は、機

を挙ぐ。論註に有凡夫人煩悩成就と曰ふを祖述す[33]」、「此れは論註の語を用い給ふ[34]」、「煩悩等の二句は所被の機を挙ぐ。『論註』の語を用ひて悪業因果を掲ぐ[35]」と記す如くである。

親鸞が『教行信証』に於いて煩悩成就の語を用いる三箇所の内、御自釈が一箇所であり、他の二箇所は引文である。その二箇所である『教行信証』「証巻」「真仏土巻」の引文は、この『論註』の文である。以下、この文の「三界繋業畢竟不牽」「不断煩悩得涅槃分」について、検討を進める。

曇鸞の『論註』は、天親（四〇〇～四八〇頃）の『無量寿経優婆提舎願生偈』（以下、『浄土論』）の「註」であるが、『浄土論』と『論註』では、阿弥陀仏とその浄土の相について、国土荘厳一七種、仏荘厳八種、浄土の菩薩荘厳四種が明かされる（三厳二十九種）。国土荘厳の第一の清浄功徳成就の文に、次のようにある。

有凡夫人煩悩成就亦得生彼浄土三界繋業畢竟不牽則是不断煩悩得涅槃分[36]。

凡夫人ありて煩悩成就するもまたかの浄土に生ずることを得れば、三界の繋業、畢竟じて牽かず。すなはちこれ煩悩を断ぜずして涅槃分を得[37]。

『論註』を細かく丁寧に解説・現代語訳された『仏典講座二三　浄土論註』を参考に[38]、「煩悩成就」と「不断煩悩得涅槃」の語が見られるこの箇所の内容を考えてみる。

この文は国土荘厳について示された箇所であるから、阿弥陀仏の浄土の功徳について明かされていることは言うまでもない。煩悩成就の凡夫（煩悩ずくめの凡夫）が安楽浄土に生まれることができれば、迷いの三界につなぎとめる業の繋縛力があるといえども、煩悩成就の凡夫を牽くことができなくなるというのである。つまり、浄土に往生するということは、煩悩を断つことなく涅槃のさとりを得ることであるという説示である。

浄土に往生すれば、不断煩悩得涅槃であると示されるところから、ここは浄土往生後の相と理解することができ

る。ただし、「断」ということについては、少し注意が必要である。『仏典講座二三』によれば、「断」の外に「滅」「捨」「離」などの漢字が使われ、煩悩が煩悩みずからの働きを停止したことを「断」と但し書きされる。すなわち、煩悩をすべて断除してしまうことではなく、煩悩があっても、煩悩として働かなくなったところを「断」と表現しているのであり、実際は「超える」という意味に理解することができるようである。

四　親鸞の著作における不断煩悩得涅槃

親鸞の著作の中、不断煩悩得涅槃の句は、『教行信証』で三箇所（四四、一〇五、一三三頁）に見られる他、『入出二門偈』（四八三頁）、『三経往生文類』（五四五、五五三頁）、『尊号真像銘文』（五七五、六〇一頁）に見ることができる。いずれも、『論註』の文との直接的な関連の中で説かれている。[39]

不断煩悩得涅槃の語については、鍵主良敬が次のように問題提起をしている。長くなるが、私の問題意識と重なる所もあり、次に引用をする。[40]

> 煩悩が充ち溢れているような凡夫であっても浄土に往生することができれば業の繋縛から逃れられるので、煩悩を断じなくても涅槃の分を得られるというように読むことができる。しかしそれでは浄土に往生することができたならばという予測のうえでのことにならざるをえない。では、往生できていない凡夫はどうすればいいのか、当然そちらの方が我われの関心のもとになる。そこで、そのような凡夫であっても仏力に由って往生を得るのだから、往生を得れば涅槃も得られるという解釈もないわけではない。しかしそれではあくまでも期待していることになって確かな事実というわけにはいかない。
>
> 以上のようなこともあって、涅槃分の「分」に注目し、一部分としての分を得る意とか、因としての可能性を

いうという説、またそれ自体の分斉という考え方など古くから議論されている。重要な問題である。それらを含めて浄土に生まれた後のことにならざるをえない点もないわけではない。しかし、「真仏土」の課題として問われているのは、単なる未来の予想についてのことではないのはいうまでもないことである。ではそれはどういうことなのか。現実の問題であるということの真意についての検討ということになる。

「分」をどのように解するかはさて措いて、煩悩を断ずることなしに涅槃を得るというのはどういうことなのであろうか。未来の単なる予想でないとすれば、どういうことになるのか。煩悩はあっても邪魔にならなくなることであるとの説をよく聞くことはあるが、それでいいのであろうか。

鍵主が古くから議論されていると指摘する如く、涅槃分の分については、多くの講録で取り上げられる。善譲[41]、円月（一八一八～一九〇二）[42]、義山は[43]『論註』に遡っての分斉の義との理解も示し、あわせて智暹（一七〇二～一七六八）[44]、玄智[45]、石泉[46]などにおいても分満・分斉の両義如何についての議論が記される[47]。

その他、講録では、「証巻」引文について、引文の順序や現当二益などが議論されている。

引文の順序とは、不断煩悩得涅槃の語を明かす清浄功徳成就は、『論註』において、国土荘厳一七種の第一であり、三厳二十九種の第一でもあるが、「証巻」に引かれる際には、荘厳妙声功徳成就・荘厳主功徳成就・荘厳眷属功徳成就が先に引かれる点についての言及である。柔遠（一七四二～一七九八）『顕浄土真実行文類頂戴録（以下、頂戴録）四』[48]や円月『仰信録　巻五』[49]に指摘される通り、存覚『六要鈔』に「問、何今逆次引用之耶、答、今此清浄是其総相、是故本論自総開別、而抜簡要引用之時今以総相結所抄出之別相歟」（『真聖全Ⅰ』三二六頁）とあるものを承けてのことであろうか。善譲・義山・芳英・玄智・石泉も等しく、この点について言及している。

また、現当二益については、「証巻」引文だけではなく、「真仏土巻」引文においても、議論が為されている。今、

一例として芳英の解釈を紹介する。「証巻」の註釈は『集成記　巻四二』に[50]、「真仏土巻」の註釈は『集成記　巻五一』に記される[51]。

『集成記　巻四二』では、「三界繫業畢竟不牽とは、畢竟不退是れまた現当に通じるなり。……現生に三界繫業畢竟不牽の益有り。いかに況や当来証大涅槃に、繫業之を牽くこと有る事無し。……煩悩成就願力に依るが故に彼の土に往生す」と説かれる。現生に三界の繫業に牽かれない利益があるのであるから、当来の浄土往生後にも、三界の繫業に牽かれないというのである。更に続けて、「今吾が浄土真宗は他力往生の一道なり、大いに他家始本とは異なれり」と記され、「此の不断煩悩の文、他流には総て当益と為す。一流相伝の改邪鈔・正信偈大意、御一代記・御文、皆現益となす」と説示される。不断煩悩得涅槃の文は、他流では、当益と理解されるが、浄土真宗では、皆、現益を示すと指摘し、その文証として、『正信偈大意』・『御一代記聞書』・『御文章』の文が挙がる。『正信偈大意』は[52]、

願力の不思議なるがゆゑに、わが身には煩悩を断ぜざれども、仏のかたよりはつひに涅槃にいたるべき分に定まるものなり。

の文である。『御一代記聞書』は第二〇四条の文である[53]。

又御一代記に曰く、一念帰命のとき、不退の位に住す。これ不退の密益なり、これ涅槃分なるよし仰せられ候ふと。

また『御文章』は第五帖第五通の末代無智章の文である[54]。

御文に曰く、されば無始以来つくりとつくる悪業煩悩を、のこるところもなく願力不思議をもつて消滅するいはれあるがゆゑに、正定聚不退の位に住すとなり。これによりて「煩悩を断ぜずして涅槃をう」といへるはこ

のこころなり。この義は当流一途の所談なるものなり。他流の人に対してかくのごとく沙汰あるべからざるところなり。

これらを文証としてあげた後、「和讃及び当巻談義は現当を兼ねる。その当益は、現生一因の所得の故に、多くは現に約す。現に涅槃分を得、則ち当来に必ず無上涅槃に至る。単に当来の義は、未だ他力の奥旨を尽くさず」（傍点：引用者）と結ばれる。傍点部分が示すように、当巻、すなわち「証巻」では現益と当益を兼ねると理解され、単に当益としてのみ理解するならば、他力の深い主旨を理解し味わい尽くしていないというのである。

一方、『集成記　巻五一』では、まず不断煩悩得涅槃について「不断煩悩と曰ふ、即ち煩悩を具足する人、本形を改めず、浄土に生ずるを得る。証巻得ればと訓ずる、今得るにと訓ずる、是れ即ち注意」との重要な注意が喚起される。即ち、「証巻」引文では、「かの浄土に生ずることを得れば、三界の繋業、畢竟じて牽かず」と訓読されるのに対し[55]、「真仏土巻」引文では、「かの浄土に生ずることを得るに、三界の繋業畢竟じて牽かず」と訓読されるのである[56]。この注意喚起を踏まえて、「身心命終を兼ねるが故に、証巻の引意、具に二意を含む。今、真土を証し、当来の生に約す。……清浄仏土の証果」と示される。次に、三界繋業畢竟不牽についても同様に、「是れまた証巻は現当の益に通ず。今畢竟安楽大清浄処に約する」と示し、「則是不断煩悩得涅槃分は、証果涅槃なり。是れまた証巻及び処処の釈は現当に通ず。証巻の記の如し。今、清浄仏土自体の成就不思議力に約す」と結ばれる。「証巻」或いは、その他の箇所では、現益当益に通じるが、ここ「真仏土巻」では清浄仏土自体の益、つまり当益と解している。

このような芳英の理解は、智暹・柔遠・石泉・円月にも見られ、大方の諸註釈に共通するものである[57]。

また、これと関連して、不断煩悩得涅槃の語について、多くの講録に共通する解釈が見られる点は注目される。

機辺（機相）と仏辺（仏徳・法徳・国徳）とに分配・分断・切断する解釈である。「証巻」御自釈・「証巻」引文・「真仏土巻」引文に対する釈の別なく列挙すれば、次のような釈を見ることができる。

・玄智『光融録　巻二三』[58]

惑を断ぜずといえども、仏願によるが故に往生を得る。

・柔遠『頂戴録四』[59]

不断と言ふは是れ機辺に約す、若し仏辺に約すれば是れ一切の無明を破し尽す。

・興隆『徴決　巻一三』[60]

不断煩悩は、機辺未だ断ぜずと約す、得涅槃分は、法徳の利益に約す。涅槃分は、相承の聖教に依るに、具に三釈あり。一は彼土涅槃極果と為す。『銘文』……二門偈……今の引文及び真土巻・往生文類もまた同意に応ず。……二は此土正定利益と為す。正信偈大意・勧文（御文章）・一代聞書末。今の引文また傍らに此の意存するか。……三に彼土の廣門益と為す。六要抄。

・興隆『徴決　巻一四』[61]

今此の文を引き、彼の国土の徳、煩悩具足の凡夫をして無上涅槃界を得さしむことを顕わす。……証巻また此の文を引く。彼正しく証果の辺を顕わす。今正しく土徳を示し、異と為すなり。

・善譲『敬信記　巻一三』[62]

吾浄土門は、機相より云へば、則不断煩悩なり。法徳より談ずれば則信楽開発の刹那、仏眼の圓断圓悟を領する。……今煩悩成就の機を挙て、獲信の即時に正定聚に入ると談し給ふ。

・善譲『敬信記　巻一四』[63]

能入の機に就けば煩悩具足、彼の涅槃界の国徳に就けば、初生の当体清浄無垢の涅槃なり。

・円月『仰信録　巻五』[64]

不断煩悩得涅槃分とは、彼国の土徳なり、

何れも、傍点は引用者によるものであるが、不断煩悩得涅槃（分）の七（八）字を、前半（不断煩悩）と後半にわけ、前半を機辺（機相）についての説示、後半を仏辺（仏徳・法徳・国徳）についての説示と見る。このような理解は、『真宗叢書』におさめられる「真宗百論題」においても見ることができる。真宗百論題の第六七に「業障消滅」が置かれ[65]、附として「不断煩悩」が設けられており[66]、「業障消滅」では、浄満院（円月）、願海院（義山）の論が掲載され、「不断煩悩」では、浄満院（円月）、宣布院（覚音）、願海院（義山）、専精院（鮮妙）の論が掲載される。その所論を紹介すると、

円月は、「業障消滅」において、「一念の所に未来の業障を消滅せば信後に三毒煩悩の起るべき理なし」という問いを出し、仏力に約する理解と、機相に約する理解とを見る。すなわち、機相に約す理解として、「信後に至って煩悩の起るものはこれ凡夫の顕相なり、願力滅尽せざるが故に起るには非ず、これ有漏の穢体未だ亡失せざるが故に起るなり」と明かし、仏力に約す理解として、「仏智疑惑の根本無明を破し已って一念の信心定まるとき界外無漏真実報土の業因を成弁するが故に、三界の繋業畢竟じて牽かず、故に罪は障ともならず、さればなき分なり、消滅してなくなると云ふにはあらず、たとひ煩悩ありとも往生の障とならざる故になきと同じ」と明かすのである。また「不断煩悩」において、『論註』下巻の清浄功徳釈にある「不断煩悩得涅槃分」は『維摩経』弟子品の「不断煩悩而入涅槃　是為宴座」に依っている事を示した後、『尊号真像銘文』、『六要抄』、『浄土真要鈔』、『正信偈大意』『御文章』を文証として挙げ、「今按ずるに、得涅槃を釈するに異あり、或いは当益とし、或いは現益とす。

……或いは現益として正定聚なりとし、或いは当果として彼土正定とし、又無上涅槃とす、その義不同ありと知るべし。不断煩悩とは、若し通途に依れば正定聚にあれ（初地）、涅槃にあれ（妙覚）、惑を断ぜずして証を得ること決してこれなし、而して今煩悩を断ぜずして涅槃を得る、此れ即ち願力の不思議と称する所以なり」と論じる。

覚音も同様に、「煩悩の断不断は約法約機の左右にあり。……約法より云ふときは煩悩はことごとく断滅して証果を得しめたまふ、……約機より云ふときは、自力の功を以ては一毫未断の故に不断煩悩得涅槃なり」と明かし、前掲の『御文章』末代無智章「無始以来つくりとつくる悪業煩悩を、のこるところもなく願力不思議をもつて消滅するいはれあるがゆゑに、正定聚不退の位に住すとなり。これによりて煩悩を断ぜずして涅槃をうといへるはこのこころなり。」の句点までが「法の断滅に約」し、句点以後を「約機の不断に約す」を論じる。

義山・鮮妙にも同様の解釈を窺うことができる。義山は、「不断は機の無作」「断は法徳」と示し、『浄土真要鈔』、『正信偈大意』などを文証とし、約機約法の釈としている。鮮妙も『論註』、『維摩経』、『大智度論』、『正信偈』、『尊号真像銘文』、『六要抄』『浄土真要鈔』、『正信偈大意』『御文章』『御一代記聞書』の文を挙げつつ、「機上の顕相」「法徳の密益」に分配している。

非常に諄諄しくなったが、不断煩悩得涅槃（分）を解釈する際に、成るほど、不断煩悩は、衆生の顕わな姿そのものを指す語であり、機辺（機相）を表す述語と見て、何ら誤りではない。また、得涅槃は、衆生自身の功績で涅槃を得るのではなく、阿弥陀仏の本願力によって、衆生に涅槃を得しめることを表しており、この意味に於いては、仏徳・法徳を表す述語と見て、何ら誤りであるはずがない。しかし、今、私たちがなさねばならないことは、不断煩悩得涅槃（分）の七（八）文字だけの解釈をすることではない。この七（八）文字が、どのような文脈で用いられ、どのようなことを親鸞が示さんとしたかについて、虚心にその意を窺うことが、私たちに課せられた大きな問

題であろう。

勿論、これまでにも、そのような理解がなかったわけではない。

前掲興隆『徴決』巻一三と巻一四において、「真仏土巻」引文は彼土の益であるが、「証巻」引文は、彼土の益を示しつつ、此土正定聚の益を傍らに示すと指摘されている。また、中西は前掲書『顕浄土真仏土文類講讃』において、次のように述べる（括弧内：引用者）。

この文（『論註』引文）は、すでに「証文類」に引用されているものである。しかし、「証文類」では、行信の因によってひらかれた証果として述べられたもの…として示されているが、いま「真仏土文類」では、真仏土そのもののもつ功徳として示されているのである。

さて、大きく遠回りをしたが、本題に戻る。親鸞は不断煩悩得涅槃の語によって、我々に何を示さんとしたのであろうか。我々は何を読み取らねばならないのであろうか。『教行信証』において、不断煩悩得涅槃の語は、三つである。一つは「行巻」末尾に置かれる正信偈の「能発一念喜愛心　不断煩悩得涅槃」の語であり、他の二は、上来述べてきた「証巻」引文、「真仏土巻」引文である。しかし、同じ不断煩悩得涅槃の語が用いられているが、その意は必ずしも、同義ではないのである。

「真仏土巻」は、真仏真土が明かされる巻であるから、不断煩悩得涅槃は浄土の徳の説示であり、『論註』当面と同等の意になると受け取ることができ[67]、『仏典講座二三』の指摘の如くに理解をし、詳細を省く。

五　現益としての不断煩悩得涅槃

正信偈の文は「よく一念喜愛の心を発すれば」とあることから、信の一念ということである。「証巻」の文は、

往相回向の証が明かされる諸引文の中に示されている。正依の『大経』や異訳『大経』、『論註』などが連続して引かれ、大胆な読み替えをしつつ、親鸞の己証である現生正定聚が説き明かされる中で、不断煩悩得涅槃の語が用いられている。このことからすれば、正信偈と「証巻」では、信一念の利益として理解することができそうである。

では現益としての不断煩悩得涅槃とは、如何なる事態をいうのであろうか。

正信偈の参考書を見ると、「本来は捨てねばならない煩悩であるにもかかわらず、阿弥陀さまのはたらきによって仏になっていく私にとっては、煩悩が往生の障害にはならない事を示している。[68]」、「煩悩があっても、煩悩に引きずり回されることがない。」「煩悩があっても邪魔にはならず[69]」などと示されており、これらは、既に見てきた講録等にも論じられている。例えば、円月が、「罪は障ともならず、さればなき分なり、消滅してなくなると云ふにはあらず、たとひ煩悩ありとも往生の障とならざる故になきと同じ」「愚縛の凡身なれば三毒熾然として起れども、障とならねばあれどもなくが如くなり」と記す如く如きである。[70]

これらの主張の論拠として、円月や鮮妙等が述べる他力横超断と呼ばれる親鸞の御自釈がある。これは『教行信証』「信巻」の「横超断四流釈」にある次の文を指す。[71]

> 断といふは、往相の一心を発起するがゆゑに、生としてまさに受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。ゆゑにすなはち頓に三有の生死を断絶す。ゆゑに断といふなり。四流とはすなはち四暴流なり。また生・老・病・死なり。

横超断四流は、善導（六一三～六八一）の『観経四帖疏』「玄義分」の「帰三宝偈」に出る語であるが[72]、親鸞は、この「断四流」を先のように御自釈に示す。

大方の意味は次のようになろう。阿弥陀仏の真実信心をその如くに信知・聞知・聞信する者は、もはや、迷いの

生死を経巡ることはない。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道や、胎生・湿生・卵生・化生の四生を輪廻する因も果もなくなってしまう。四流とは、四暴流であり、それは煩悩であり、また、迷いの果である生老病死をいう。本願を信知する信の一念に、速やかに迷いの生死が断たれるというのである。

この世に生がある限り、煩悩がなくなるのではない。獲信の念仏者となるからといって、煩悩が消滅するわけでもない。[73] 臨終の一念まで、常に、煩悩から離れることができないのが、凡夫である。けれども、煩悩がなくならないからといって、地獄に堕ちねばならないと恐怖におののいたり、不安にうちひしがれたりする必要はないというのである。

「信巻」の後半には、「悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと」という親鸞自身の悲痛な歎きが表白された後、王舎城の悲劇の主人公の一人である阿闍世の苦悩とその解決・融解が、冗長な『涅槃経』引文によって説かれている。[74] 阿闍世は、自身の罪業の果としての堕地獄の恐怖におびえる存在として語られるが、その阿闍世に対して、「阿闍世王の為に涅槃に入らず」の密義が懇々と説かれる。そして、悪業煩悩の自身をつつみこむ仏の大悲が明らかとなった阿闍世は、「もしわれあきらかによく衆生のもろもろの悪心を破壊せば、われつねに阿鼻地獄にありて、無量劫のうちにもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もつて苦とせず」と語ることとなる。自身の堕地獄におののいていた阿闍世が、阿鼻地獄に堕することを苦としないと語るのである。苦としないと語る阿闍世において、何が明らかとなったのか。それが、「断四流」である。自身の悪業・煩悩が消えるわけではない。しかし、その悪業が因となり、再び迷いの生死を際限なく繰り返す果につながるという因果が超えられるのである。それ故、「証巻」引文の後、「教巻」から縷々述べ来たった往相回向の釈が閉じられるところで、

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、浄なるがゆゑに果また浄なり。知るべしとなり。[75]

と記されるのである。迷いの三界につなぎとめる煩悩の繋縛力を超えて、阿弥陀仏の本願力が、煩悩成就の凡夫を浄土往生・成仏させるというのである。煩悩による迷いの輪廻という迷いの因果が断たれ、阿弥陀仏の清浄な因果に依るというのである。

『正信偈のはなし』に記されるように[76]、決して煩悩を断ち切る必要がないというのではない。浄土の教えが仏教である以上、煩悩は減少・消滅すべき対象であることにかわりはない。けれども、どれだけ必死にもがきあがいても、自力では断ち切ることができないのが煩悩である。断ち切ることができないけれども、というよりも寧ろ、断ち切ることができないからこそ、阿弥陀仏の大悲が唯一の拠り所となるのである。煩悩成就の凡夫であるが故に、煩悩の衆生を救わずにはおれない弥陀の大悲を我が事と知ることができたのである。煩悩成就の凡夫が、煩悩成就・不断煩悩というわが身の「いたみ」と共に、煩悩を不断のまま、煩悩に牽かれることがないと知らしめられ、浄土往生・成仏が定まるところに、正定聚不退転の念仏者の姿があるということができるのである。

註

（1）『真宗学概論』一九六〇年、永田文昌堂、一七二～一七四頁。

（2）『真宗聖教全書（以下、真聖全）Ⅰ』九頁。『真聖全Ⅱ』一〇三頁に引用。

（3）勿論、親鸞は師法然の開宗した浄土宗から新たに浄土真宗を開かんとする意志があったということではない。それは、「高僧和讃」源空讃に「智慧光のちからより　本師源空あらはれて　浄土真宗をひらきつつ　選択本願のべたま

ふ」（『真聖全Ⅱ』五一三頁）とある事からも明らかである。因みに、「高僧和讃」では、龍樹・曇鸞・道綽・源信・源空に対して本師の語が付せられる。

（4）『真聖全Ⅱ』一五四、一五五頁

（5）親鸞思想における往生と成仏については、拙稿を参照のこと。「親鸞思想における往生と成仏の意義」『中西智海先生喜寿記念文書　人間・歴史・仏教の研究』永田文昌堂、二〇一一年。

（6）拙稿「親鸞の「現生正定聚」考―臨終来迎否定に関連して―」（『龍谷大学論集』四六二号、二〇〇三年）において、現生正定聚について触れた。参照いただければと思う。

（7）『真聖全Ⅱ』七二頁。

（8）「現代の人間と宗教」『龍谷大学仏教文化研究所報』第三一号、二〇〇四年。鍋島直樹・那須英勝・玉木興慈・井上善幸編『仏教死生観デジタルアーカイブ研究』（方丈堂出版、二〇一一年）に転載。

（9）『真聖全Ⅱ』一〇三、一〇五、一三三頁。

（10）『真聖全Ⅱ』四四六、四四九頁。

（11）『真聖全Ⅱ』四八三頁。

（12）『真聖全Ⅱ』五〇二、五〇五頁。

（13）『真聖全Ⅱ』五四五（略本）、五五三（広本）頁。

（14）『真聖全Ⅱ』六七八頁。

（15）本願寺出版社の各『現代語版』。その他、深川倫雄『入出二門偈講讃』永田文昌堂、一九八一年、二七七頁。普賢晃寿『浄土文類聚鈔概説』永田文昌堂、一九八七年、一二七頁。普賢晃寿『顕浄土真実証文類講讃』永田文昌堂、一九九一年、五八頁。紅楳英顕『浄土三経往生文類（広本）講讃』永田文昌堂、一九九五年、六二頁。霊山勝海『末燈鈔講讃』永田文昌堂、二〇〇〇年、二〇四頁。徳永一道『浄土文類聚鈔講讃』永田文昌堂、二〇〇三年、一三一頁。高田慈昭『浄土三経往生文類講述』永田文昌堂、二〇〇三年、一〇三頁。小川一乗『『顕浄土真仏土文類』解釈』東本願寺、二〇〇三年、一一三頁。廣瀬惺『『浄土文類聚鈔』に学ぶ』東本願寺、二〇〇四年、一四二頁。中西智海『顕浄土真仏土文類講讃』永田文昌堂、二〇〇五年、一三八頁。川添泰信『高僧和讃講讃』永田文昌堂、二〇一〇年、四三頁。

(16) 小妻道生「煩悩成就」『高田短期大学紀要』第三号、一九八五年。紫雲龍教「親鸞の罪悪観に関する表現とその意義」『印度学仏教学研究』第五十九巻第二号、二〇一一年など。

(17) 金子大栄・大原性実・星野元豊『真宗新辞典』法蔵館、一九八三年、四六一頁。また、中村元『仏教語大辞典』では、煩悩具足の項目はあるが（一一七三頁）、「煩悩成就」の項目はない。

(18) 『The Collected Works of SHINRAN』Volume I (Jodo Shinsyu Hongwanji-ha, 一九九七)（『英訳親鸞聖人著作集』第一巻）によれば、具足煩悩の語について、行巻の智昇引文は「a foolish being full of blind passions（五五頁）」、信巻の『涅槃経』引文は「those possessed of blind passions」（一三二頁）と訳される。また、煩悩成就については、『浄土文類聚鈔』の二箇所が「foolish beings possessed of all blind passinos」（三〇一頁、三〇七頁）と訳される以外は、ほぼ「foolish beings possessed of blind passinos」と訳される。『教行信証』の三箇所（一五三頁、一五六頁、一九一頁）、『入出二門偈』（六二七頁）、「高僧和讃」（三六四頁、三七〇頁）、『三経往生文類』（六四三頁）、『親鸞聖人御消息』（五四四頁）。

(19) 煩悩具足の語は、『尊号真像銘文』（略本五六〇頁、広本五七七）、「高僧和讃」（五〇九頁）、『御消息』（六五九・六九〇・六九一・七〇一・七〇二・七一二頁）、『歎異抄』（七七五・七七七・七八六・七九二）に、のべ十二回用いられている。

(20) 『教行信証』においては「具足煩悩」であるが、一点、『般舟讃』引文に「貪瞋具足凡夫」（『真聖全Ⅱ』一五三頁）がある。貪欲瞋恚愚痴が三毒の煩悩と称されることから、この語は、煩悩具足に準じて理解できる。

(21) 『真聖全Ⅱ』六二九頁

(22) 『尊号真像銘文』（『真聖全Ⅱ』略本五六四、広本五八四頁）、『一念多念文意』（『真聖全Ⅱ』六一五、六一九頁）。

(23) 『広辞苑』（第六版）一三八〇頁

(24) 前掲小妻論文では、詳細な検討が試みられ、「親鸞の意図する成就は、達成する、完成する、充分に果されるという意味が中心であること。更にはその成就の主体が、成就されるべき内容にふさわしいものである」と小結される。小妻氏の論では、成就の主語が煩悩であり、「煩悩が成就する」として理解される。

(25) 『真聖全Ⅱ』六一八頁。

(26) 『真聖全Ⅱ』六二頁。

(27)『顕浄土真実教行証文類徴決（以下、徴決）巻一三』『真宗全書』二三。二〇五頁。興隆は聖道門について、このように記すが、凡そ、仏教で、これを目指さないものはないと考える。また、この語の後に、「有凡夫人煩悩成就は、愚縛の凡夫の煩悩具足を指す。成就は、具足円満の義なり」とあり、煩悩成就と煩悩具足を同義としている。

(28)「仏智不思議の世界―不断煩悩得涅槃―」『大谷学報』第六一巻第一号、一九八一年。

(29)『教行信証摘解（以下、摘解）巻五』『真宗叢書』九、十頁。

(30)『教行信証文類随聞記（以下、随聞記）巻三二』『真宗全書』二八、一六〇頁。

(31)『顕浄土真実教行証文類光融録（以下、光融録）巻二三』『真宗全書』二五、一二八頁。玄智は続いて「成就は具足と同じ」であると記す。

(32)『徴決　巻一三』『真宗全書』二三、一八九頁。

(33)『教行信証集成記（以下、集成記）巻四一』『真宗全書』三三、三五頁。

(34)『顕浄土教行証文類敬信記（以下、敬信記）巻一三』『真宗全書』三一、二八四頁。

(35)『摘解　巻五』『真宗叢書』九、十頁。

(36)『真聖全Ⅰ』三一九頁。

(37)『浄土真宗聖典　七祖篇（註釈版）』一一一頁。

(38)早島鏡正・大谷光真『仏典講座二三　浄土論註』大蔵出版、一九八七年、二七〇頁。

(39)今その全てを見る紙数の余裕がなく、『教行信証』に限って検討を続ける。

(40)鍵主良敬『顕浄土真仏土文類―迷失せる恩徳―』東本願寺、二〇〇八年、五五頁。

(41)『敬信記　巻一三』『真宗全書』三一。三〇二頁。

(42)『仰信録　巻五』『真宗叢書』七。二一〇頁

(43)『摘解　巻五』『真宗叢書』九。一七頁。

(44)『樹心録　巻六』『真宗全書』三六。九三頁。

(45)『光融録　巻二三』『真宗全書』二五。一四五頁。

(46)『随聞記　巻三三』『真宗全書』二八。一八九頁。

(47)講録における議論の端緒は、存覚の『六要鈔』であろうか。『教行信証』の最も古い註釈書として『六要鈔』を見

るならば、「正信偈」の「不断煩悩得涅槃」に関する「分は初生に約す、若し究竟に約せば、宜しく此の字を略すべし、或いは、又七言の字数を調へんがために之を除くに失なし」（『真聖全』II、二六七頁）という註釈を土台・土俵として、議論が為されているということができる。現代でも、前掲普賢『顕浄土真実証文類講讃』、紅媒『浄土三経往生文類（広本）講讃』等でも言及がある。

(48)『真宗叢書』七。八一頁。
(49)『真宗叢書』七。二一〇頁。
(50)『真宗全書』三三。五四頁。
(51)『真宗全書』三三、一八三頁。
(52)『註釈版』一〇二七頁。次下二つの文と合わせ、現代の論考でも、論拠として用いられることが多い。
(53)『註釈版』一二九七頁。
(54)『註釈版』一一九二頁。
(55)『親鸞聖人真蹟集成』第一巻、法蔵館、一九七三年、三四六頁。
(56)『親鸞聖人真蹟集成』第二巻、法蔵館、一九七四年、四三九頁。
(57) 智暹『樹心録　巻六』（『真宗全書』三六、八九頁）には、「然煩悩成就至定聚の数……此れ現益を示す」とある。柔遠『頂戴録四』（『真宗叢書』七、七九頁）には、「煩悩成就凡夫より定聚之数に至る已来は正しく至心信楽の願正定聚の機を挙ぐ。これ即ち現生の密益なり、住正定聚故必至滅度より即是一如に至る已来は……当益にして……」とあり、石泉『随聞記　巻三三』（『真宗全書』二八。一八九頁）には、「此土現益の定聚とし或は浄土廣門の定聚とし、又は滅度とすると云ふ。色々差別あるが、何れ浄土の証果は、剋論すれば唯一の大涅槃と上を結する言なり」とあり、また、円月『本典仰信録巻五』（『真宗叢書』七、二〇三頁）には、「十八願成は「即得往生住不退転」と説きて、文相の当分は是れ当益にして、義旨に就かば現益なり」とある。智暹・柔遠・円月の釈は、「証巻」御自釈に対する釈であり、石泉のものは、「証巻」の『論註』引文に対する釈である。
(58)『真宗全書』二五。一四四頁：「証巻」引文に対する釈。
(59)『真宗叢書』七。八五頁：「証巻」引文に対する釈。
(60)『真宗全書』二三。二〇四頁：「証巻」引文に対する釈。

(61)『真宗全書』二三、三〇四頁：「真仏土巻」引文に対する釈。
(62)『真宗全書』三一、二八四頁：「証巻」御自釈に対する釈。
(63)『真宗全書』三一、三七〇頁：「真仏土巻」引文に対する釈。
(64)『真宗叢書』七。二一〇頁：「証巻」引文に対する釈。
(65)『真宗叢書』第二巻、七二〇頁。
(66)『真宗叢書』第二巻、七二七頁。
(67) 註(5)拙稿に於いて、「真仏土巻」の把捉についても熟考すべきとの指摘をした通り、浄土の理解如何で、その意も動くと言わねばならない。が、今は紙数の余裕がなく、「浄土の徳」の表現にとどめる。
(68) 森田眞円『ひらがな正信偈』本願寺出版社、二〇〇三年、六九頁。
(69) 藤田徹文『やさしい正信偈講座』本願寺出版社、一九九三年、八八頁。
(70)『真宗叢書』第二巻、七二一頁。
(71)『真聖全Ⅱ』七四頁。
(72)『真聖全Ⅰ』四四一頁。
(73) 百論題に於いて、円月の「一念の所に未来の業障を消滅せば信後に三毒煩悩の起るべき理なし」「今家聖教の中、或は「三世の業障一時に消滅す」と云ひ、或は「命の娑婆にあらんかぎりは罪はつきざるなり」と云ふ、相違云何」という問いや、覚音の「衆生獲信の一念に於て煩悩悪業残る所なく断尽すと云はば、信後臨終の夕まで三毒煩悩起るの理由云何」という如き問いは、現代において、親鸞を学ぶ者が持ちうる真摯な問いということもできる。
(74) この点については、拙稿に理解の一端を論じた。「『教行信証』「信巻」の構造―親鸞の仏道の学び―」『真宗研究』第四七輯、二〇〇三年。『教行信証』「信巻」逆謗摂取釈について」『龍谷大学仏教文化研究叢書二六　典籍と史料』（大取一馬編、思文閣出版、二〇一一年）所収。
(75)『真聖全Ⅱ』一〇六頁。
(76) 薗田香勲・岡亮二・薗田宗人『正信偈のはなし』永田文昌堂、一九七五年、三六頁。